

イザヤ書4-5章 「裁きの霊による洗い」

1A まことの支え 4

1B 一人の男にすぎる七人の女 1

2B 主の若枝 2-6

2A 酸いぶどう 5

1B 主の愛の歌 1-7

2B 災い 8-25

1C 貪りと酩酊 8-17

2C 悪を引き寄せせる者 18-25

3B 遠い国々からの攻撃 26-30

本文

イザヤ書4章を開いてください、私たちは、イザヤが、エルサレムの町が高慢になって、まるで異教の町のようになっていることを預言していたのを思い出してください。主ご自身ではなく、金銀、馬や戦車、そして、占いなどに身を任せていました。そこで主が、そうしたものを少しずつ取り除かれますが、彼らは主に立ち返らず、いつまでも人に頼っていました。主に立てられている長老については、退けます。なぜなら、そこには主ご自身から与えられた権威があるからです。それで、彼らは若い気まぐれ者に頼るようになります。そうやって、つまり、ついに主が立ち上がられるというシナリオになっています。そして、主は改めて、エルサレムを高ぶった女に譬えました。3章18節以降です。着飾って、色目を使って歩いている女です。ところが、彼女がかさぶただけになり、化粧は悪臭となっている姿になります。それは、エルサレムが廃墟になっている姿です。バビロンによってエルサレムが滅ぼされた時のことの預言です。25節には、戦いに出て行って、男たちがいなくなっている姿になっています。

1A まことの支え 4

そこで4章は、頑なに主以外のものに頼ってきた彼らが、ついに、主ご自身にすがろうとしている幻から始まります。

1B 一人の男にすぎる七人の女 1

¹ その日、七人の女が、一人の男にすぎりついて言う。「私たちは自分のパンを食べ、自分の服を着ます。私たちがあなたの名で呼ばれるようにして、恥辱を取り去ってください。」

「その日」とあります。これは主がお定めになった、ご自分の計画を完成される日のこと、終わりの日のことです。ここに書かれているのは、男がとても少なくなったので、けれども当時の女にとつ

での最も屈辱的なことは、結婚をできず、子を産むことができないということです。それで、なんと食べることも、着ることは自分で賄いますから、どうか私と結婚してください、とお願いします。普通は、花婿の父が花嫁の父に、結納金のようなものを渡すのですが、その逆をしているのです。

けれども、ここはすばらしい救い主の約束になっています。この「一人の男」というのは、キリストご自身です。2 節に、そのメシア到来の約束が続いています。ユダの民が、全く自分が外敵に虐げられて、また滅ぼされてしまうという時に、その心は全く砕かれます。へし折られます。その時に主の前に出ます。そこで救ってくださる方がキリストだということです。高ぶる心が砕かれて、勇気を出して主ご自身のところに行けば、そこにあるのは美しい主ご自身との愛の関係です。

私たちも、このすばらしい神の恵み、その救いにあずかるのは、この女たちにあるように、恥も外聞も捨てて、キリストにすぎることではないでしょうか。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」福音には、恥がともないます。けれども、神を信じて、救われることの喜びには代えられないのです。

2B 主の若枝 2-6

² その日、主の若枝は美しいものとなり、栄光となる。地の果実はイスラエルの逃れの者にとって、誇りとなり、輝きとなる。³ シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖なる者と呼ばれるようになる。みなエルサレムに生きる者として書き記されている。

「主の若枝」は、キリストに対する代表的な呼び名の一つです。ダビデがその生涯の終わりに、歌をうたいました。「Ⅱサムエル 23:5 まことに私の家は、このように神とともにある。神が永遠の契約を私と立てられたからだ。それは、すべてのことにおいて備えられ、また守られる。神は、私の救いと願いを、すべて育んでくださるではないか。」主が、このダビデと契約を結んでくださり、主の救いとその子孫から生まれ出ることを教えてくださいました。それまで、イスラエルが小さく、周囲の敵に虐げられ、けれども王が立てられることによって救いもたらされます。その究極がキリストであり、キリストはイスラエルを救い、それだけでなく異邦人たちもご自分のものとします。

それを、「育んでくださるではないか」という言葉をもって言い表しています。ダビデの後に、そのずっと後に主が、救いが現われる時までを育て上げてくださるということです。そして、時が満ちた時にキリストが現れてくださいました。イエス様は、「わたしが律法と預言者を成就しに来たのだ。」と宣言されました。救いが訪れたのです。

そこで、「若枝」という言葉がキリストに使われたのです。これから御国としての大きな枝を張るのだという期待をもって、小さきところから出てくるその希望が「若枝」と呼ばれるのです。11 章 1 節に、イザヤは彼のことをこう預言しました。「11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若

枝が出て実を結ぶ。」エッサイは、ダビデの父のことです。つまりダビデからキリストが出てくるということ。そしてエレミヤが預言しました。「23:5-6 見よ、その時代が来る。——【主】のことば——そのとき、わたしはダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この地に公正と義を行う。彼の時代にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。『【主】は私たちの義』。それが、彼の呼ばれる名である。」このように、キリストの麗しさと栄光によって、地に公正や義の果実が結ばれるのです。

そして、「イスラエルの逃れの者」がいることを教えています。イザヤが一貫して語っている人々のことです。1章8-9節にも、残された者が「ぶどう畑の小屋」のようになると書いてあります。自分の高ぶりがつぶされて、主の前にへりくだり、主の御名を呼び求めるイスラエル人たちのことです。主が初めに来られた時に、その慰めを得た人々は少なかったです。福音書では、キリストはご自分の民のために来られたのに、彼らは受け入れなかったと書いてあります。しかし、受け入れた者、残された者はいました。赤ん坊のイエス様を見た時に、神殿でシメオンが行った時のことを思い出してください。彼は、イスラエルが慰められることを待ち望んでいて、聖霊が彼の上に留まっていた。そして、幼子イエスを見て、こう預言します。「ルカ 2:29-32 「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。あなたが万民の前に備えられた救いを。異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

そして、福音は異邦人の間で広がり、実を結びました。それが今に至るまで続いています。そしてこれから、地はさらに不法で満ち、主が御怒りを下されます。そして諸国はイスラエル、エルサレムに向きます。もう既に、エルサレムは世界紛争の焦点になっています。そして、そこで再建される神殿の中に入る、荒らす忌まわしい者、反キリストが現れます。その不法の人が現れたら、イエス様は山々に逃げなさいと言われました。その時に、かつてない、これからもない大患難が来ると言われました。その時に日数が少なくされなかったら、選びの民は救われることはないだろうとイエス様は言われます。これが、終わりの日の逃れの者、残された人々です。その荒野の山々に逃げた者たちのために、主イエスが戻って来られます。そして、滅ぼそうとする諸国の軍隊を打ち滅ぼしてくださいます。

そして「シオンに残された者、エルサレムに残った者」ともあります。荒野に逃れずに、留まっていた人々もいます。けれども、諸国の軍隊は彼らを全滅させるべく攻めてきます。そこに主が来られます。こうして彼らは救われますが、その時にその救い主は自分たちがかつて、付き刺した者であることを悟るのです。「ゼカリヤ 12:9-10 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」そして13章1節には、「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開

かれる。」とあります。

そして彼らが、「聖なる者と呼ばれるようになる。」とありますね。すばらしいです。私たちは先んじて、御霊が注がれて、同じように高ぶりが砕かれて、聖なる者とされます。彼らは、それを終わりの日に受けるのです。

そして、「みなエルサレムに生きる者として書き記されている。」天には書物があります。モーセが、民のために執り成した時、「出 32:32 どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」と言いました。イエス様は、自分の名が天で書き記されていることを喜びなさいと言われました(ルカ 10:20)。そして黙示録には、サルディスにある教会に対して、「3:5 またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。」と言われました。町に住民登録の登記簿があるのと同じように、天において、主の書物があり、そこに記されている者が必ず、救われます。

⁴ 主が、さばきの霊と焼き尽くす霊によって、シオンの娘たちの汚れを洗い落とし、エルサレムの血をその町の中から洗い流すとき、⁵ 主は、シオンの山のすべての場所とその会合の上に、昼には雲を、夜には煙と燃え立つ火の輝きを創造される。それはすべての栄光の上に覆いとなり、⁶ その仮庵は昼に暑さを避ける陰となり、嵐と雨から逃れる避け所、また隠れ家となる。

主は、「さばきの霊と焼き尽くす霊」を持っておられます。しかし、それは滅びしつくす火ではなく、むしろ、真価が試されるところの火です。不純なものはすべて燃やされる、あるいは溶かされて、純粋なものだけが残ります。残された民、神に立ち返り、神に救いを呼び求める者たちに対する裁きは、このようなものです。教会に対しても同じです。主が私たちを天に招き入れる時に、同じような火があるのだということをパウロは教えています。「1コリント 3:15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」

レビ記において、月のものがある女は不浄の期間に入ったことを言っています。そのところから、これまで高ぶりの中にいたシオンの娘たちの汚れが洗い落とされることが書かれています。

そして、神の国における、エルサレムの幻で終わります。そこには、主が共におられること、それによって災いから守られることを、昼の雲と夜の火の輝きで示してくださる約束があります。これは、出エジプトの荒野における主の守りの働きと同じものです。主がかつてイスラエルを砂漠の苛酷さ、その熱さと寒さから守られたように、主の臨在が彼らの安全となってくれます。

2A 酸いぶどう 5

1B 主の愛の歌 1-7

そして次、5 章は、これまで主が語られた、「わたしが育て上げたのに、彼らが真逆のことをして

しまった。」ということと同じものです。しかし、ここでは「主の愛の歌」として語られていくものです。公正や義の実を結ばせていくように、主があらゆる育て上げをしてくださったのに、その逆になってしまったことを嘆き悲しむ歌になっています。

¹「さあ、わたしは歌おう。わが愛する者のために。そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に ぶどう畑を持っていた。² 彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった。

イスラエルには、ぶどう畑が多くあります。主に岩地であるイスラエルは、まず石を取り除くところから始めます。あるいは坂にぶどう園を作ることもあり、石を積み上げて平らな土地を作るところから始めます。そして、酒ぶねも遺跡で残っています。足で押して、それから流れ出る汁を受け取るようにさせます。ここまでの手間をかけたのですが、甘いぶどうではなく、酸いぶどうが実ってしまいました。ここまでは甘い歌でした、けれども酸いぶどうができてしまったと言いました。

³ 今、エルサレムの住民とユダの人よ、さあ、わたしとわがぶどう畑との間をさばけ。⁴ わがぶどう畑になすべきことで、何かわたしがしなかったことがあるか。なぜ、ぶどうがなるのを心待ちにしていたのに、酸いぶどうができたのか。

ここでの法廷の場面ですが、今度はエルサレムの住民とユダの民を裁判官にしています。そして、裁かれているのは神ご自身とそのぶどう畑です。神がイスラエルにしてくださったその手塩をかけて行為で、不足があるかどうか、裁いてほしいと言いました。ユダの民は、愛されなかったから神を求めなかったのではありません。実は、むしろ愛されていたからこそ、その恵みに甘えて、反抗して悪い実を結んだのです。

似たようなことを、預言者サムエルがイスラエルの民に言いました。「¹サムエル 12:3 さあ今、【主】と主に油注がれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを虐げ、だれかを打ちたたいたかどうか。だれかの手から賄賂を受け取って自分の目をくらましたかどうか。もしそうなら、あなたがたにお返りする。」サムエルはイスラエルの民のために労苦し、預言活動を行ない、彼らのために祈りました。しかし、彼らがイスラエルには周りの国々のように王が必要だということで、サムエルを退けてしまったのです。それで、サムエルは、私があなたに何か悪いことをしたのか？したのであれば、ぜひ裁いてほしいとお願いしました。

⁵ さあ、今度はわたしがあなたがたに知らせよう。わたしが、わがぶどう畑に対してすることを。わたしはその垣を取り払い、荒れすたれるに任せ、その石垣を崩して、踏みつけられるままにす

る。⁶ わたしはこれを滅びるままにしておく。枝は下ろされず、草は刈られず、茨やおどろが生い茂る。わたしは雨雲に命じて、この上に雨を降らせないようにする。」

主を退けるまでは、当たり前、当然の権利としていた豊かさが、彼らが退けることによってなくなってしまいます。ここに出てくる荒廃は、神が頭に来て、いじめようとして行なわれたのではなく、彼らが主の関わりを拒むので、主がその守りの手を引かれたからこそ起こった事です。私たちは、主から守られています。愛されています。そして教会はその愛を示すところです。ところが、それを覚えずに反抗するならば、その守りから外れてしまうことになります。

私たちも、主の恵みがあまりにも当たり前になっていて、それで反抗する時に、その恵みが外されて、初めて、悔い改める機会が与えられますね。放蕩息子の譬えが、その典型です。彼は父の家から離れて、自分の惨めさを味わい、それで初めて、自分が罪を犯したことに気づきました。

⁷ 万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家。ユダの人は、主が喜んで植えたもの。主は公正を望まれた。しかし見よ、流血。正義を望まれた。しかし見よ、悲鳴。

この流血と悲鳴が、具体的な酸いぶどうの意味であります。主が、アブラハムを召し出し、イスラエルをエジプトの地から救い出し、約束の地まで導き入れ、それでそこにご自分の住まい、神殿を置き、そこから支配されるという王国をお造りになろうとしていました。しかし、まるで違うものができてしまいました。

ここは、福音書の中で大きなテーマになります。宗教指導者がイエス様に対してなされたことに主が当てはめておられるからです。彼らが農夫として描かれており、ぶどう畑の主人の息子が後取りだから殺してしまおうと言ったというところに表れています。マタイ 21 章 33-39 節を読みます。

33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。34 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにしもべたちを遣わした。35ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。37 その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。38 すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。39 そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。

まさに、イザヤ書 5 章 1-2 節の言葉です。そして、農夫であります、彼らはそこにいる宗教指

導者らです。そして収穫を得ようとして主人が遣わす僕は、預言者たちであります。ところが、農夫たち、すなわちその時の王や祭司などの指導者たちは、預言者を迫害しました。それが、旧約聖書における預言者たちの多くが辿った道でした。そこで主が遣わしたのは、自分の息子、すなわちキリストご自身です。ところが農夫たちは、彼が跡取りだから、彼の財産を自分の手に入れられるということで、なんと殺してしまいました。事実、彼らは最後に御子ご自身を殺しました。

良い実が結ばれるところが、このような悪い実になってしまった。それは何だったのか？一つは、預言者に対する迫害は、「自分に心が刺されること、それを拒んだ。」ということです。主の与えられる言葉は、心を指します。しかし、それは魂の癒しを得るための言葉であり、私たちを回復させるものです。したがって、危険なことは、自分が刺されることを回避しながら御言葉を聞くことです。自分が守れると思うところだけ取捨選択する、あるいは拡大解釈して聞くこと。あるいは、ただ聞いているだけで、それを適用せずに実践しないこと。こうしたことを行なうことによって、聞けば聞くほど、悪い実が私たちの心に芽生えていきます。

もう一つは、息子を遣わされた農夫たちが、「跡取りだから、財産を手に入れられる」と言ったことです。主によって与えられたその恵みを、私物化することです。「私たちがここに私たちの空間、私たちの守れるものを作ります。」として、神の恵みを自分のものとする、所有とすることです。主から与えられている時間、金銭、また人々をさえ、自分の必要を満たすために用いていきます。そうすると、神から与えられれば、与えられるほど、その霊的な既得権は大きくなり、悪い実を結んでいきます。そしてイエス様が語られたように、このようになったのです。

私たちは、イエス様の刈り込みを心に歓迎しましょう。主が何かをしておられます、それは主が愛しておられ、関わりたいと願っておられるからです。主から与えられている機会の中に生きましょう。主は実を結ばせたいと願われています。主はみなさんをぶどう畑であると呼ばれます。その愛の中で育まれてください。

2B 災い 8-25

1C 貪りと酪酏 8-17

⁸ わざわいだ。家に家を連れ、畑に畑を隣り合わせる者たち。あなたがたは場所を残さず、自分たちだけこの地に住もうとしている⁹ 私の耳に万軍の主は告げられた。「必ず、多くの家は荒れすたれ、大きな美しい家々も住む者がいなくなる。¹⁰ ツエメドのぶどう畑が一バテを産し、一ホメルの種が一エパを産するからだ。」

災いを宣告していきます。思い出すが、イエス様が、宗教指導者に対して、八つの災いを宣告されたことです。その最後は、神殿が滅ぼされるところで終わります。実はそれも、イザヤの預言の裏打ちがあったと言えるでしょう。ここにある預言が、イエス様が彼らを糾弾されたのと同通って

います。

一つ目の災いは貪欲です。土地を買収し、占有する貪欲です。イスラエルには、土地について大切な掟があります。レビ記 25 章 23 節に、「土地は、買い戻しの権利を放棄して売ってはならない。土地はわたしのものである。あなたがたは、わたしのもとに在住している寄留者だからである。」とあります。そこは彼らの土地ですが、それは主が彼らに与えられたのであって、本質的には彼らのものではなく主のものなのです。そして、土地を売ってはならないというのは、主がそれぞれに与えられたものをいつまでも相続し、損なわれることのないようにするためです。それを、自分の金の力に任せて、貧しい人たちから土地を買い取り、また地代が高いので貧しい人が購入することがないようにしている、ということです。こうやって奪い取ることによって、貧しい人たちが泣き叫んでいます。

主は裁きとして、家を荒れすたれるに任せます。10 節は畑の収穫量が非常に少なくなる、ということですが。

¹¹ わざわいだ。朝早くから強い酒を追い求め、夜が更けるまで、ぶどう酒に身を委ねる者たち。
¹² 彼らの酒宴には豎琴と琴、タンバリンと笛とぶどう酒がある。彼らは主のなさることに目を留めず、御手のわざを見もしない。

二つ目の災いは「遊興」です。彼らは貧しい者を虐げて上で富を築き、その上で朝早くから飲み、遊興を貪っています。そこにある問題は何か？主のなさることに目を留めない。御手のわざを見ない、ということです。

キリスト者は、酩酊や遊興とは正反対の存在です。エペソ書 5 章でパウロは、このことをはっきりと説明しています。「エペ 5:18-19 また、ぶどう酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。」お酒とそれに伴う音楽であれば、主を忘れます。しかし聖霊に満たされ、主に賛美を歌うのであれば、それは主の御業をこれまで以上にあげめます。

¹³ それゆえ、私の民は 知識がないために捕らえ移される。その貴族たちは飢えた者となり、その民衆は渴きで干からびる。¹⁴ それゆえ、よみは喉を広げ、果てしなく口を開ける。エルサレムの威光も、騒音も、どよめきも、そこでの歓声も、よみに落ち込む。

遊興にふける者たちに対する裁きは、捕囚です。知識がないため、とありますが、神を知らないでいるために、ということです。エレミヤが何度となく、捕囚前に彼らに、神の知識を伝えましたが、彼らは聞く耳を持ちませんでした。それから、食べ物には困らない貴族でさえ飢えます。それから、

民衆は飲む水さえなくなり、渇きで脱水症状に陥ります。

そして、まるでエルサレムの地面に、開いた穴、呑み込む口があるように、人々がいなくなります。陰府は、死者が下るところです。そして、後に裁きを受けるところです。そこに、次々と呑み込まれていきます。そして、彼らの威光や騒音、歓声などもなくなります。

¹⁵ こうして人間はかがめられ、人は低くされる。高ぶる者の目も低くされる。¹⁶しかし、万軍の主はさばきによって高くなり、聖なる神は正義によって、自ら聖なることを示される。¹

2-3 章にあった、彼らの高ぶりが低められ、その代わりに、裁きによって主が高められ、聖であることが示されます。主は、時にご自身の聖さを裁きの中で示されます。そうでなければ、ご自身の名が汚されるからです。ノアの時代の洪水もそうでしたね、人々が悪を計っているようなときに、彼らを滅ぼされることによって、ご自身の聖さを示されました。

⁷ 子羊は自分の牧場にいるように草を食べ、肥えた獣は廃墟にとどまって食をとる。

ユダの土地が、わずかに子羊がいるところ、獣がいるところとなりほぼ無人地帯になります。彼らへの祝福である、乳と蜜の流れる地とは正反対の姿です。

2C 悪を引き寄せる者 18-25

¹⁸ わざわいだ。嘘を綱として咎を引き寄せる者。車の手綱できるように、罪を引き寄せる者たち。

¹⁹ 彼らは言う。「彼のすることを早くさせよ。急がせよ。それを見てみたい。イスラエルの聖なる方のご計画が近づいて、成就すればよい。それを知りたい」と。

三つ目の災いは、「嘘、偽り」です。一つ目と二つ目の災いが肉体の欲望に関わるものでしたが、ここから、思いの中で犯す罪の類いです。神は真理であり、嘘は、神に違反する行為です。神に恐れを抱かないといけません。しかし、心の中であえて神への恐れを抑圧しなければ、嘘をつくことができません。しかし、「嘘をついたところで、神が何か私に罰を与えるのかい。やってみるならやってみろ。」という嘲りであります。今の時代、自分の感じていること、思っていることが神のようになっている時代です。それで、事実や真実が捨て去られている時代です。

²⁰ わざわいだ。悪を善、善を悪と言う者たち。彼らは闇を光、光を闇とし、苦みを甘み、甘みを苦みとする。

四つ目の災いが、真理を曲げる罪です。嘘が、自分が間違っていると分かっているながら犯す罪であるのに対して、こちらは悪を善だと言ってしまふところで、さらに大胆不敵であります。しか

し、これもまた今の時代にはびこっています。真理に基づくこと、善にかなうことを語ると、その語っていること自体が悪であるとみなすようになっていきます。殺人や虐殺がいけないと声を上げている時に、「あなたは、差別している」とか言って、間違っていることを間違っているという人々を悪人に仕立て上げます。そして、

²¹ わざわいだ。自分を知恵のある者と見なし、自分を悟りのある者と思い込む者たち。

五つ目が、知的高慢です。悪を善とするだけでなく、それを知識で理論武装します。ロマ書には、「1:22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、」とあります。自分の悟りは正しいのだと自己慢心に浸っています。

²² わざわいだ。酒を飲むことにかけては勇士、強い酒を混ぜ合わせることにかけては豪の者。

²³ 彼らは賄賂のために、悪者を正しいと宣言し、その悪者から正しい者たちの正しさを遠ざける。

六つ目の災いが、「裁きを曲げる」ことであります。箴言に、レムエルという王に対してその母が言った言葉があります。「31:4-5 レムエルよ、これは王がすることではない。ぶどう酒を飲むのは王がすることではない。強い酒を飲むのは君主がすることではない。酒を飲んで、定められたことを忘れ、苦しむ者みなへのさばきを曲げるといけないから。」

そして、このようにして裁きを曲げることによって、神の公正を究極なまでに歪めます。そのことによって、正しい人が罪人のように裁かれて、悪者が正しい者とされます。これが、イエス様の身に降りかかったことですね。バラバが釈放され、イエス様が十字架刑に処せられました。

²⁴ それゆえ、火の舌が刈り株を焼き尽くし、枯れ草が炎の中に溶けゆくように、彼らの根は腐り、その花も、ちりのように舞い上がる。彼らが万軍の主のおしえをないがしろにし、イスラエルの聖なる方のことばを侮ったからだ。

主によって、彼らが死に絶えます。その理由が、みおしえをないがしろにして、聖なる方のことばを侮ったからです。2章の、終わりの日におけるシオンの山を思い出してください。そこから主の御言葉が、その教えが広がりました。ここから離れてしまったから、滅びることになってしまいます。

²⁵ それゆえ、主の怒りはその民に向かって燃え、これに御手を伸ばして打つ。山々は震え、彼らの屍は、通りで、あくたのようになる。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

主が、イスラエルの民に対して、地震を起こしたり、外敵に攻められるままにされます。しかし、それだけで終わらないと言われます。

3B 遠い国々からの攻撃 26-30

²⁶ 主は遠く離れた国に旗を揚げ、地の果てから来るように合図される。すると見よ、それは急いで速やかに来る。²⁷ その中には、疲れる者も、つまづく者もない。だれ一人、まどろまず、眠らず、その腰の帯は解かれず、履き物のひもは切れない。

主の行われる最終的な裁きは、遠く離れた国からのものです。それは、初めにアッシリアです。ヒゼキヤ王はへりくだって祈る時に、神はアッシリアから救われます。しかし、その後、バビロンがやってきて滅ぼしました。

²⁸ その矢は研ぎ澄まされ、弓はみな張られ、馬のひづめは火打石のように、その車輪はつむじ風のように見える。²⁹ その吼え方は獅子のよう。若獅子のように吼え、うなり、獲物を捕らえる。奪って行くと、救い出せる者はいない。

この様は、まるで黙示録9章に出てくる、恐ろしい軍隊のようにさえ見えます。矢と弓だけでなく、まるで火を伴うような軍隊です。そして、獅子のように見えます。一切、免れることはできません。

³⁰ その日、その民は海のとどろきのように、イスラエルにうなり声をあげる。地を見やると、見よ、闇と苦しみ。光さえ雨雲の中で暗くなる。

海からの轟のようにやってきます。そして地には闇と苦しみ、光も真っ暗になるという有様です。こうこれで終わり、ということです。しかし、主はこれでご自分の怒りを満たされます。

これでイザヤのウジヤの時代の預言が終わります。6章からは、彼が改めて主に呼ばれて、遣わされる時です。暗黒のメッセージで終わりましたが、実はもっと暗い世がやってきます。この世はもっともっと暗くなって行って、私たちは驚き怪しみます。しかし、主のことはこそが、私たちの光です。この方であれば、決して揺るがされません。終わりの日の、高くかけられたシオンを思い出しましょう。そこからみ言葉が出てきます。